

プレゼンテーションVI 「典礼暦年におけるマリアの記念」

白浜 満（日本カトリック典礼委員会委員）

第2バチカン公会議による典礼刷新に基づいて新しく編纂された現行のローマ典礼暦が1970年1月1日から施行されてから、2010年1月1日で40周年を迎えます。この節目のときに当たり、新しい典礼暦年においてマリアの記念がどのように位置づけられ、どのような意図のもとに祝われるのかについて振り返ってみたいと思います。

基礎的文献

これらのことを知る基本的な文献として、第2バチカン公会議の『典礼憲章』第5章（103条「聖母の崇敬」）、マリアについて公会議の基本的な教義をまとめている『教会憲章』第8章「キリストと教会の秘義との中における神の母・処女聖マリアについて」、また、これらの公会議文書に基づいて改訂された『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』、そして、刷新されたローマ典礼における聖マリアへの信心について解説を行う教皇パウロ6世の使徒的勧告『マリアーリス・クルトゥス—聖マリアへの信心について—』（1974年2月2日）を挙げることができます。とくに、『マリアーリス・クルトゥス』の第1部「典礼に生きる聖なるおとめマリアへの信心」は最適です。さらに、教皇ヨハネ・パウロ2世が、1987年6月7日（聖霊降臨の主日）から翌年8月15日までを「マリアの年」と宣言するにあたり、1987年3月25日に公布した回勅『救い主の母—レデンプトリス・マーテル—』は、第2バチカン公会議において示されたマリアについての基本的な教えを確認し、さらに、「神の母を、一方でキリストに結びつけ、他方で教会と結びつける『二重のきずな』（5番）を浮き彫りにしています。

『教会憲章』に組み込まれたマリアに関する教え

第2バチカン公会議は、マリアに関する教えを、独立した一分野としてではなく、『教会憲章』の第8章（最終章）に組み込みました。この公会議の意図が『教会憲章』54条で次のように説明されています。「聖なる教会会議は……受肉されたみこと

ばと神秘体との秘義の中における聖なる処女マリアの役割と、キリストの母であり人々特に信者の母である神の母に対して、あがなわれた人々が果たすべき義務とを解明しようと望むものである。ただし、マリアに関する全部の教理を述べること、あるいは神学者の研究によってまだ完全に解明されていない諸問題を解決することを意図するものではない」。

このように、公会議は、神の救いの計画においてマリアが果たした役割を、キリストとその教会の神秘の中に位置づけて理解しようとしています。マリアの使命は、キリストとその教会から切り離しては考えにくいのです。そして、『教会憲章』62条は、そのマリアの役割が現在も続いていることを、次のように教えています。「恩恵の計画におけるマリアの母としてのこの役割は、お告げに際してマリアが忠実に与え、そして十字架のもとでためらうことなく堅持し続けた同意から始まって、選ばれたすべてのものの永遠の完成に至るまで絶えず続くものである。マリアは天にあげられた後もこの救いをもたらす務めを放棄することはなく、かえって数々の取り次ぎをもって、永遠の救いのたまものをわれわれに得させることを続けられる」。ここに、マリアの崇敬の基礎があります。

マリア崇敬の意図

『教会憲章』第8章の構造自体にも示されているように、マリア崇敬の意図を、次の3つの点に整理することができます。すなわち、①マリアの生涯を通して示された神の恵みをたたえ（『教会憲章』55～59条）、②マリアの取り次ぎを願い（同60～62条）、③マリアの模範にならって生きる（同63～65条）ためです。

そして、『教会憲章』66条は、次のように締めくくっています。「神の恩恵によって子に次いですべての天使と人間の上に高められたマリアは、キリストの諸秘義に参加した母、神の最も聖なる母として、特別な崇敬をもって教会からたたえられる。確かに聖なる処女は最古の時代より『神の母』

という称号のもとに敬われ、信者はあらゆる危険と必要に際してそのご保護を祈り求めつつ、そのもとに避難するのである。とりわけエフェソ公会議のときから、マリアに対する神の民の崇敬はすばらしい発展をとげ、尊敬と愛、祈りと模倣となって表れるようになった。……教会の中に常に存在したこの崇敬は、全く独自のものではあるが、父と聖霊と受肉されたみことばとに等しくささげられる礼拝とは本質的に異なるものであり、その礼拝に大いに奉仕するものである」。

このような目的のために、教会は典礼暦年の中にマリアの記念を組み込み、「キリストの神秘を一年の周期をもって祝う際、教会は、幸いな神の母マリアをも特別の愛をもって敬い、また、信者の信心のために、殉教者やその他の聖人を追憶する」（「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」8）のです。

こうして、典礼暦年は、1年を周期として「キリストの諸神秘を祝う」ことを中心軸とし、そこに、おとめマリアをはじめ、殉教者や聖人の記念を組み込みながら、三位一体の神への礼拝に向かっていくという大きな原則をもっています。そのため、典礼分野においても、三位一体の神に対しては「礼拝」(adoratio)、聖母マリア・殉教者・聖人に対しては崇敬(cultus)あるいは信心(devotio)という用語を用いて、その区別を明らかにしようとしています。

マリア崇敬の略史

【1～4世紀】『教会憲章』66条にも述べられているように、マリア崇敬は、とくにエフェソ公会議(431年)のときからすばらしい発展を遂げました。それ以前の1～3世紀ごろは、ローマ帝国内におけるキリスト教の迫害時代のためか、あるいは殉教した人々の命日を記念することに注意が向けられていたためかもしれませんが、マリア崇敬はあまり表には現れてきていません。しかし、それはマリアへの崇敬・信心が、初期の信者の間になかったことを意味するものではありません。おそらく、早くからマリア崇敬は行われていたと思われる。事実、迫害時代が終わり、信教の自由が認められるようになると、東方教会の影響により、4世紀以降、マリアへの崇敬が広まっていきました。

【5世紀】マリア崇敬の歴史上、エフェソ公会議が大きな意義をもつのは、「神の母」(テオトコス)

という称号のもとに、マリアを崇敬することが認められたからです。キリストには神性と人性の2つの本性とともに、それぞれの本性に対応して神の御子のペルソナと人間のペルソナがあると主張したネストリウス派は、マリアはキリストの人間性の母であってもその神性の母ではあり得ないと主張しました。これに対してエフェソ公会議は、キリストは神性と人性の2つの本性が神の御子のペルソナのうちに融合しているため、キリストを産んだマリアを「神の母」と呼ぶことができるという判断を下しました(DS 62-63)¹⁾。しかし、これはしばしば、教会外からの誤解を招く原因となっているように、決してマリアを女神として崇めることではありません。

【6～19世紀】6世紀の終わりごろ、ローマ教会の暦の中で1月1日を聖マリアの出産(Natale Sanctae Mariae)²⁾という名称で祝い始めたのが、マリアの記念の基礎となっています。そして、7～8世紀にかけて、マリアに関連する他の4つの記念、聖マリアの誕生(9月8日:5世紀のエルサレムに由来)、聖母の清め(2月2日:主の降誕から40日目)、聖マリアへのお告げ(3月25日:主の降誕の9か月前)、聖母の被昇天(8月15日:東方では6世紀ごろからマリアの眠りDormitioという名称で祝っていたが、8世紀に西方では被昇天assumptioという名称で祝うようになった)が、徐々に取り入れられると、1月1日の聖マリアの出産の祝いがしだいに薄れて、イエスの割礼の記念として祝われるようになりました。

聖マリアの誕生(9月8日)の9か月前にあたる12月8日は、8世紀ごろからもともとマリアの母アンナがマリアを懐胎したことを記念する日として祝われ始めました。同時にこれに関連して、聖マリアの無原罪についての信心も生じてきましたが、長い間、神学論争の的となりました。ローマ教会では、アヴィニョン捕囚(1309～76年)後、教皇が帰還してから、12月8日に無原罪の聖マリアを祝う慣習が取り入れられたようです。また、フランシスコ会出身の教皇シクスト4世は、この祝いのためのミサ祈願を作成し、1477年にローマ教区内で公式に祝うようにしました。さらに、1708年、教皇クレメンス11世の命によって、無原罪の聖マリアの祝いがローマ典礼の全教会で行われるようになりました。こうして、教会が聖マリアの無原罪についての教義決定をしたのは、教

皇ピオ9世の時代の1854年でした(DS 428-429)。その4年後の1858年に、フランスのルルドにおいて出現した聖母マリアが、名前を尋ねるベルナデッタに対して、「わたしは無原罪の御宿りです」と答えたことは、非常に印象深い出来事として語り継がれています。

【20世紀】エフェソ公会議の千五百周年を記念する1931年、教皇ピオ11世が神の母聖マリアという名称を復興させて祝うようにしたことはとても意義深いことです。なぜなら、マリアに与えられた「神の母」という名称こそ、キリストとその教会の神秘におけるマリアの役割を表す根本的な名称だからです。また、歴史的にも、主の降誕の8日目にあたる1月1日は、マリアの他の祝祭日の根源となる最初の記念だったからです。この神の母聖マリアの祭日は、第2バチカン公会議後の新しい典礼暦年でも採用されました。ちなみにビザンティン典礼では、12月26日に神の母聖マリアが記念されています。

なお、ローマの教会で7世紀ごろから祝われてきた聖母の被昇天は、1950年に教皇ピオ12世によって公式に教義として宣言されました(DS 606-607)。

現行の典礼暦におけるマリアの祝祭日

現行の典礼暦におけるマリアの祝祭日は、以下のとおりです。

- ①祭日：神の母聖マリア(1/1)、無原罪の聖母(12/8)、聖母の被昇天(8/15)
- ②祝日：聖母の訪問(5/31)、聖マリアの誕生(9/8)
- ③記念日：聖母のみ心(聖霊降臨後第2主日後の土曜日)、天の元后聖マリア(8/22)、悲しみの聖母(9/15)、ロザリオの聖母(10/7)、聖マリアの奉献(11/21)
- ④任意の記念日：ルルドの聖母(2/11)、ファティマの聖母(5/13)、カルメル山の聖母(7/16)、マリアのみ名(9/12)、年間週日の土曜日・聖母マリアの信心ミサ

ただし、名称こそ主の記念として祝われるようになっている神のお告げ(3月25日：主の降誕の9か月前)と主の奉献(2月2日)も、聖母マリアと御子イエスの母子としての深いきずなを表す祝祭日であり、広義ではマリアの祝祭日に含めて考えることができます。

マリアの祝祭日の連続性

ローマ典礼暦において、1年という枠内の制限を考えず、聖母マリアとイエスの生涯の流れに合わせて年代記的にマリアの記念の順序(連続性)を探ると次のようになります。

無原罪の聖母(12/8)→聖マリアの誕生(9/8：12月8日から9か月後)→聖マリアの奉献(11/2)→神のお告げ(3/25)→聖母の訪問(5/31)→主の降誕(12/25：3月25日から9か月後)→神の母聖マリア(1/1：主の降誕から8日目)→主の奉献(2/2：主の降誕から40日目)→【主の過越の聖なる三日間】(主の死と復活)→聖母のみ心(聖霊降臨後の第2主日後の土曜日：使徒たちとともに祈っていた聖母マリア)→聖母マリアの被昇天(8/15)→天の元后聖マリア(8/22：聖母の被昇天から1週間後)

ただし、無原罪の聖母を、主の降誕に関連深い祭日として、神の母となるために聖母マリアに与えられた特典的な恵みとして、主の降誕と神の母聖マリアの直前に位置づけることは十分可能です。その上で、典礼季節との整合性も考慮しながら、マリアの記念をあえて1年という枠内に収めるなら、

聖マリアの誕生(9/8)→聖マリアの奉献(11/21)→無原罪の聖母(12/8)→主の降誕(12/25)→神の母聖マリア(1/1)→主の奉献(2/2)→【主の過越の聖なる三日間】(主の死と復活)→聖母のみ心(聖霊降臨後の第2主日後の土曜日：使徒たちとともに祈っていた聖母マリア)→聖母マリアの被昇天(8/15)→天の元后聖マリア(8/22)

というように、聖マリアの誕生(9/8)から始まり、天の元后聖マリア(8/22)で終わる連続性を考えることができるでしょう。

このマリアの記念の1年の枠内に、神のお告げと聖母の訪問の祝祭日をうまく組み込めないのは残念ですが、別の簡潔な秩序づけとして、

神のお告げ(3/25)→聖母の訪問(5/31)→無原罪の聖マリア(12/8)→主の降誕(12/25)→神の母聖マリア(1/1)→主の奉献(2/2)

という連続性も考えられます。

このように現行のローマ典礼暦において、ある程度の年代記的な連続性をもってマリアの記念を行うことができます。たとえ、マリアの記念が必ずしも年代記的な順序と一致せずに不自然に感じ

られたり（たとえば、9月8日の聖マリアの誕生の祝日の1週間後の9月15日に悲しみの聖母の記念日がある）、また、前後したり（2月2日：主の奉献と3月25日：神のお告げ）することがあっても、機械的に年代記的な連続性をもたせるために典礼日を組み替えることは避けるべきです。典礼暦は、教会の聖なる伝承の一部であり、とくに、歴史的な出来事に関連する日付が故意に変更されることによって、聖なる伝承がゆがめられてしまう危険があります。

いずれにしても、典礼暦年の中心的テーマであるキリストの諸神秘を1年周期で祝う中で、そのよき協力者であり、またキリスト信者の模範である聖母マリアの祝祭日の意義を関連づけて説明し、信者をキリストへの生き生きとした信仰に導くことが重要です。

マリアへの信心—聖母月とロザリオの月

現行のローマ典礼暦には何も触れられていないものの、マリアへの信心から生じてきた聖母月（5月）とロザリオの月（10月）の習慣と、これに関連する信心業（聖母行列、ロザリオなど）を無視することはできません。歴史的にその起源が古いのはロザリオの月であり、レパント海戦の勝利（1571年10月7日）を祝って、1573年の同日を教皇ピオ5世が「ロザリオの聖母」の祝日として制定したことに由来します。そして、しだいに10月全体が「ロザリオの月」と呼ばれ、聖母にささげられた月となっていきました。

5月の聖母月は、フランス皇帝ナポレオン1世により幽閉の身となった教皇ピオ7世が、ナポレオン失脚後の1814年にローマに帰還できたことに関連しています。教皇ピオ7世は、これが聖母のご加護によるものであることに感謝して、5月24日を「キリスト信者の扶助者聖マリア」の祝日としました。そして、しだいに5月全体が聖母にささげられた月となりました。この「キリスト信者の扶助者聖マリア」の記念は、現行の典礼暦では祝われていませんが、その1週間後の5月31日に聖母の訪問の祝日が制定されています。

典礼暦年において5月は復活節と重なり、聖母月のほうが親しみをもって祝われる傾向が見られます。しかしそこで、使徒たちとともに聖霊を待ち望んだマリアの姿を浮き彫りにしながら、聖母月をキリストの過越（死と復活）の実りである聖

霊降臨の祝いと関連づけて説明することができるでしょう。教皇ヨハネ・パウロ2世が回勅『救い主の母』44番の中で、「マリアが祈り求めるのは、キリストの犠牲によって救われた新しい神の子らを生かす聖霊のたまものだからです。マリアも、かつて聖霊降臨の日、教会とともにこの霊を受けました」と述べているように。

一方、10月の「ロザリオの月」は「年間」にあたるため、典礼暦においては、キリストの記念との関連で大きな支障はありません。10月と11月は、典礼暦において終わりの2か月にあたっていますが、11月は地上を旅する教会の終末的な完成を願い、とくに死者のために祈る月とされているため、その前の10月は「実りの秋」という自然現象との関連性も考慮して、地上を旅する教会が聖母マリアを模範とし、その取り次ぎを願いながら、多くの人をキリストのもとに導くという使命の上に、豊かな収穫を祈る月として位置づけることもできるでしょう。

信心業

教皇パウロ6世は使徒的勧告『マリアーリス・クルトゥス』の中で、伝統的なお告げの祈りは一日の時間の聖化のために、ロザリオは福音の黙想のために、貴重な信心業として高く評価し、信者にその実践を勧めています。また、教皇ヨハネ・パウロ2世は、使徒的書簡『おとめマリアのロザリオ』（2002年10月16日）を公布し、伝統的なロザリオの3つの神秘（喜び・苦しみ・栄光）に、光の神秘を加えて祈ることを提唱しました。こうして、ロザリオの祈りがよりいっそうイエスの生涯の十全な黙想を促す助けとなりました。

聖母マリアを通してキリストへ

マリアをキリストとその教会の神秘の中に位置づけ、その母性を強調して、聖母マリアの役割を浮き彫りにすることを望んだ第2バチカン公会議の精神は、しばしば「聖母を通してキリストへ」という標語で説明されています。教皇ヨハネ・パウロ2世も、回勅『救い主の母』44番において次のように述べています。「このマリアの母性は、キリスト者が特別に感謝の祭儀で体験しているものです。すなわち、子の救いの秘義の典礼祭儀のなかで、キリストは、おとめマリアから生まれ、真の肉体をもつ者として現存しています。キリスト

者は、聖母への崇敬と聖体の礼拝との間に深いつながりがあることを感じ取ってきましたが、それは当を得たことでした。……マリアは信者を聖体へと導きます。」

また、紀元 2000 年の大聖年の実施評議会によって出版された『新しいいのちの秘跡—エウカリスティア』³⁾の中でも、ミサをささげる共同体の中にマリアが現存して祈っていることについて触れています。このように教会は、イエスが十字架につけられたときに、そのもとに立って祈っていたマリアが、ミサがささげられているその共同体の中に、ともにいて祈ってくださることを信じています。

典礼暦年におけるマリアの記念も、それと関連して行われる信心業（お告げの祈り、ロザリオ、聖母行列など）も、「聖母を通してキリストへ」と導くための助けです。とくに、主日の感謝の祭儀

において、このことをもっと生き生きと体験し、聖母マリアの心でミサに参加し、聖母マリアを模範とし、その取り次ぎ願いながら、聖母マリアを通してキリストにより深く結ばれる生き方を大切にしていきたいものです。

マリアのうちに生きたもうイエスよ、
しもべのうちに来てください。
主のしもべであるわたしたちが、
主の聖なる霊と満ちあふれる力によって、
主のすぐれた道とまことの生き方によって、
主のみ心に深く結ばれて生きることができますように。
父の栄光のために、聖霊によって、
しもべをすべての悪から守ってください。

(17 世紀、サン・スルピス司祭会創立者
J・オリエ師の祈り)

¹⁾ DS は、デンツィンガー／シェーンメッツァー『カトリック教会文書資料集』浜寛五郎訳（エンデルレ書店、1982 年改訂版）参照。

²⁾ Jean-Luc Muller, *Église en fêtes, Le cycle liturgique*, Pierre Téqui, 1991, p. 45.

³⁾ Conseil de présidence du Grand Jubilé de l'an 2000, *Eucharistie, sacrement de la vie nouvelle*, Mame/cerf/centurion, 1999.